村木砦の戦い

時　　天文二十三(一五五四)年一月二十四日辰刻～申刻
於いて　　知多郡村木村（東浦町大字森岡）

一

室町時代、応仁の乱が勝敗を決することなく終わり、世の中は朝廷・幕府の権威を信用しなくなり、血を血で洗う戦国の世の中になる。ただ武力あるものだけが上下の関係なく実力で領地を広げていった下克上の時代である。
しかし、それに気が付かず、権威や位で相手を威嚇しようとして勢力を伸ばすものたちは次々と滅んでいった。とは言っても戦をするにはやはり、相手を討伐するための名目が必要だったし、名誉や地位も必要ではあった。
そんな中の一人であった、尾張守護大名の斯波義達は、永正十四(一五一七)年に遠江の国（静岡県）の天竜川まで進出し遠江を支配しようとしたが敗れて逃げ帰り、三河（愛知県）・遠江どころか尾張（愛知県）の実権も、家来の守護代の織田氏に奪い取られてしまう。
信長の先祖の織田氏はその時に尾張を支配した守護代の織田氏でなく、その一族ではあったが、守護代のさらに下の一奉行に過ぎなかった。津島の近くの海部郡勝幡城だけを支配していた小大名の跡を継いだ、織田信秀(信長の父)は勝幡城の権力を握ると、急速に力をつけていった。
しかし、上尾張（春日井郡・山田郡（後の東春日井郡）・丹羽郡・葉栗郡・中島郡）を支配する同族で位のある守護代の織田氏を攻める名目がないから、同族でも同輩の弱小の城を次々と落とし、海部地方（当時は海東・海西の二郡に分かれていた。）から熱田・末森と、愛知郡に進出し、三河国境まで支配していく。
駿河国では、守護大名の今川氏親の死後、天文五(一五三六)年に跡を継いだ兄の今川氏輝が早世し、子が無いうちに死んでしまったので、駿河（静岡県）の国の駿府（今の静岡市）の禅徳寺で禅僧となっていた弟が還俗して跡目を継ぐことになった。それが駿河の守護大名になった今川治部太夫義元である。
彼は高い位を相続し、さらに実力もあったために、瞬く間に武力で遠江をも支配し駿河・遠江両国の守護に任命され、さらに三河に進出を始める。まずは東三河をほぼ支配下に置き、西三河へも手を伸ばしだす。彼が常に家臣たちに言っている言葉が、
「我が欲する事は父の今川氏親が常々言っていた、
『都に上って、我が源氏の棟梁である足利将軍を助けて、室町幕府の権威を再興する事である。これを達成しなければ死ねるか。』
ということであったから、何とかして父の望みを達成するためにも、我は都に上がり、父上の無念を晴らしたいものだ。それなくしては我が今川軍の怨霊ははれまいぞ。みなの衆よろしく頼むぞよ。」

ということであった。
三河の国東加茂郡の松平村（豊田市）から成長した松平氏は、三河各地の豪族に血縁者を送り込み、同族を増やしつつ、松平村から安祥（安城）・岡崎へと勢力を拡大して行った。岡崎城を拠点として、ほぼ西三河を支配した後、天文四(一五三五)年に、徳川家康の祖父にあたる優秀なる松平清康が、瞬く間に三河全部を支配下に置き、さらに尾張まで攻め入って、愛知郡の森山(名古屋市守山区)において誤って部下に殺されてしまう。
跡を継いだ松平広忠（徳川家康の父）は軟弱であり、これから松平氏の勢力は徐々に衰えだし、今川義元がその松平広忠を傘下にしてしまう。西三河にも今川の勢力が作られだす。

二

尾張の国知多半島（知多郡）の緒川村に根を張った水野貞守は、松平氏などと同じ様に知多半島の各地に同族を配置して力を増やしつつ、勢力を伸ばして、常滑・大高（名古屋市緑区）・寺部（知多市）に城を持つ同族が住み着く。
その三代後の水野忠政の時にさらに勢いをつけて、南知多から山崎川南部井戸田（名古屋市南区）にまで進出し、織田氏と対立しつつ、争いにならないようにする。知多半島を支配した後、尾張へはもう進出できないと悟るや、衣浦湾をはさんだ対岸の刈谷（刈谷市元刈谷）に城を築いて、一応今川の傘下に入り、衣浦湾沿いに、三河西部(碧海(あおみ)郡・幡豆郡)を蚕食し始める。西三河に進出する時に、松平とは親交を結び、勢いのあった松平清康（家康の祖父）には愛する妻達の中で美貌の誉れ高かった於富の方（於大の方の母親）を進呈してよしみを結んだ。松平の弱いところを狙い、松平と事を構えないようにしてさらに、天文十(一五四一)年に娘の於大の方を松平広忠に嫁す。翌年天文十一(一五四二)年に竹千代(徳川家康)が生まれる。そのほかにも多くの親交を結んでいた。
忠政は、自分の跡継ぎになる息子には、織田信秀の「信」と今川義元の「元」と、をとって、水野信元と名乗らせ、織田・今川両有力大名の機嫌を損ねないように苦心した。忠政の生前中に、知多と西三河で織田・今川に属さない弱小の武将達をほとんど支配下に置き、有力大名への足場を固めた。
他方、海部郡・愛知郡を支配下に置いた織田信秀は、松平清康の死後に勢いをつけて、西三河に進出し、安祥城（安城市）を取り、そして、天文十一(一五四二)年には岡崎の東にある小豆坂の戦い（第一次）で今川軍を破り、西三河に勢力を拡大する。
天文十二(一五四三)年この年は種子島に鉄砲が伝わった年である。しかしその事はまだ尾張まで伝わっては来なかった。けれどそんな事は露とも知らずに、水野忠政は死去する。その跡を継いだ息子の水野信元は、父親に負けない有能な武将であり、さらに領地を広げるためには織田か今川のどちらかに与力しなければもはや領地拡大ができない状態になったので、両者の人柄を考えて、西三河に領地拡大ができると思い、旗色を鮮明にして、織田信秀と友好関係になり、今川義元と縁を切り、織田信秀に同心することとなる。河和・岩滑には娘を嫁にやり、姻戚関係を強めて後顧の憂いをなくし、知多半島全部に号令が出せるようになる。

信元が織田方に与力したことがハッキリすると、天文十三(一五四四)年水野信元の妹の於大は縁切りされ、三歳（現在の数え方ではまだ二歳）の竹千代を岡崎に置いて刈谷城に帰される。しかし、天文十六(一五四七)年には、水野信元の傘下にある阿久比城の久松俊勝に再嫁する。松平家と久松家では同じ大名のように見えても雲泥の差があった。
しかし、天文十七(一五四八)年にまた今川義元と、織田信秀の間で小豆坂の戦い（第二次）があり、今度は織田信秀が負ける。そして天文十八(一五四九)年には、安城城を今川軍が取り返し、織田信秀の子供の織田信弘(信長の義兄)を捕虜にしてしまい、織田信秀の人質にされていた竹千代(徳川家康)と、交換する。
織田信秀の直接の三河支配は終わりを告げる。信秀は「うつけ」といわれる信長の嫁に、美濃（岐阜県）のマムシ、斉藤道三の娘を嫁にもらい、後方と手を結ぶ事により、上尾張の同族との争いに勢力を注ぎ込む。そして、傘下の水野信元は西三河に勢力を広げていく。
天文二十(一五五一)年に、織田信秀が死に、織田信長が跡をとる。「うつけもの」の信長が跡を取るが、すぐに、母親と弟の反乱が起こり、まずは血肉の争いから始めなければならなかった。信長は実の母と実の弟と言う一番濃い血縁関係にありながら簡単に、母と弟を殺してしまう。せっかく下尾張を相続しながら、那古野城を中心に、まずは父信秀の支配地であった海部郡・愛知郡を取ることに勢力を注ぐことから始め、瞬く間に父信秀の勢力を快復した。この勢いを見て、水野信元は織田信長こそ天下を取る器と信頼をいっそう強く持つこととなった。
そして信長は直ちに勢力拡大に乗りそうとした。春日井郡は同輩・同族別の織田氏であったが、実母・弟を殺すほどだから、相手の位が上であろう同族であろうと、信長にとって遠慮はなかった。この織田勢同士の内部争いで尾張の国が弱くなったところを見て、今川勢が尾張を蚕食しようと動きだす。

三

天文二十二(一五五三)年一月に、今川義元は、織田方の山岡氏が城を構えていた碧海郡鳴原（刈谷市重原)の城を落とし、ここを拠点にして、刈谷・緒川を支配する水野信元に何度も密書を送り、手を尽くして同心を呼びかけるが水野信元は全く応じようとはしない。
かといって、刈谷の城を正面から攻撃したのでは落としにくいし、もし勝てても被害甚大となるところである。その時の刈谷の城主は水野下野守信元で、緒川の守将はその弟の水野清六郎忠守であった。信元は、潰れかかってはいるが権威だけある室町幕府ともよしみを結び、「下野守」としての官位をもらい、将軍に与力する三河の正式の大名としての地位をもらっていた。
今川義元としては、岡崎の松平家のように、味方にならないかと何度もあの手・この手で信元に近づいた。しかし水野信元は、今川義元の権威をかざしての征服には同意することなく、父の忠政が今川・織田の両者の間で中立を保とうとしたのに対し、子供の頃から織田信秀に好意を持っていて、信長の世になっても、その実力がまだわからないうちから、その考えを変えようとはしなかった。義元のやり方が気にくわなかったことも大きな原因である。

同じく天文二十二年の二月下旬の駿河の国は府中の今川義元の城。サクラ見物の大広場で催された花見の宴の中での事。この年は二月末（今の四月初旬）にサクラが満開になり、駿河・遠江の守護大名である今川義元をはじめとして、大老から近習にいたるまで、今川領内のそうそうたる武将が集まって大花見の宴会が催された。松平元康は人質の身ではあったが、駿府で成長してすでに元服も済ませ十八歳になり、一武将として末席近くに参列していた。
この城主の今川義元がみんなの前で言うには、
「今日のこの美しい花を皆とともにめでる事はとてもうれしい事である。しかし、我が胸には未だに、父上の氏親公の大望が達成できない事は痛恨のきわまりである。早く上京して足利将軍家を再建し、盛り立てて父の無念を晴らしたいものじゃ。誰か良い考えはないか。」
それを聞いた老中を初めとする近習達は、よい案がなくて皆下を向いてうな垂れてしまった。せっかくの満開のサクラを見ることができなかった。殿の野望は幾度も聞いていたけれど、そう簡単に達成できるものではない。刈谷の城ひとつを攻め取る事すら躊躇している状態である。その先には、尾張があり、美濃の斉藤道三が待ち受け、近江の佐々木・六角を味方にするか滅ぼして通らなければ京都には上れない。京都ははるか彼方に霞んでいる状態である。せっかくの素晴らしい花見の宴もこれではしぼんでしまうと皆が苦慮していた時に、末席にいた石川新左衛門が申し出た。
「拙者が昨年、尾張に忍び込んだ時に、嵐にあって、道に迷ってしまって、知多の半島の中を漂白してしまい、山や川・里も海も分からない中をうろつきました。
小さな丘をいくつも越えて、ようやくにして近くにいた農民に聞いて、案内をしてもらったところ、刈谷・緒川の両城主である水野信元の緒川城のすぐ子（北）の方角にある、村木村というところであることが分かりました。手をかざして見るに、緒川の城も、海を挟んだ刈谷の城も遠望できる場所でとても見通しがよいところでした。
そこの北には、石ヶ瀬川という川か海か定かでない広い河口が広大な葦の原を作り、その対岸の北方には、大府村・横根村がかすんで見えます。満潮時には船も出せますが、葦の湿原やら砂洲やら、川筋も定かでありません。（注１）東には三河との境をなす衣浦の入り江が広がり、境川・愛妻川・石ヶ瀬川などが流れ込み大河のようになっています。向こう岸に元刈谷村、刈谷城・熊村・高津波村などが並んでいます。
西には、海辺近くまで山が迫り、茨刺のある樹木が生い茂り、南だけは、広大な田圃と、塩田で緒川につながっていました。亥の方角（北北西）に道がつながり、猪伏村に通じ、その村からは、大高・大府・横須賀に通じる道がありました。
しかも、村木村の海岸部に、およそ五間（約９ｍ）ほどの高さのこんもりとした丘があるのです。これこそ我が今川のために天が下された天然の要塞。砦を作るに打って付けの場所とこころえました。
水野を威圧し、屈服させるためには最高の場所と見受けました。しかも、それより丑寅（東北）の方向に船を進めれば、刈谷の城に気付かれずに、逢妻の川を遡り、鴫原の砦近くに行く事ができました。
この場所にこそ、砦を築き、尾張への足がかりとすれば、水野はたちまちに屈服し、織田勢を蹴散らすのはたやすい事と見受けいたしました。いかがでありますか。」

と、申し上げました。
注1：：平成九（1997）年の東海豪雨で、この当時の川幅（海）の部分が水没しました。

四

それを聞いた、今川の猛将たち、朝比奈・江馬・左京・四江・四ノ宮・富永・富塚・井伊・などが皆笑みを浮かべて、
それは良い考えだ。くわしい地図を作ってすぐに実行しようではないかと賛成をする。
そこに、松平元康が、
「その村木村なるところから山を越えた向こうの西海岸の伊勢湾に面したところに、寺本村というところがあり、そこの城主佐治氏と我が家臣の、榊原歌之助と縁あって、互いに便りを出し合っているとの事。それによると今川への与力の心ありと見ました。この村木の砦ができれば、横須賀を通って寺元へも軍勢が出せます。そうなれば水野信元は『袋のネズミも同じ。』その後に大軍を持って尾張・美濃を突けばもはや京都は目の前になります。是非この案をお取り上げになりますように。」
これを聞いて、義元は大いに喜び、
「すぐにその案を実行せよ。まず地図を作って差し出せ、砦の設計図をわしが作るから、それを基にして実行に移れ。敵の面前で、城作りをするわけにもいかないだろうから、この駿府か、三河の吉田（豊橋市）で一度作ってから、分解して船で運び、村木の砦で再度組み立てれば、三日もあればできるであろうに。すぐに駿・遠・三の全支配地に手配して取り掛かれ。
もはや花見ではありません。すぐにそれぞれ手配を始め、
村木村付近の見取り図と、村木砦の設計図が作られ、木材を切り出し、大工を集めて工事に取り掛かりました。吉田城の近くに砦の館が作られだしました。周りから木が切り倒され、石が船に積まれて準備が始まりました。一方では、水野に対して時々攻める構えを見せて、水野方を緊張させ、神経戦も始めました。
六月の一日には、駿河や三河から発した作業船が荷物を積んで、村木村に接岸いたしました。今川の軍勢も三千人ほどが守備についてきた。
しかし、ここが信長軍と違って、五日が吉日であるから、普請はしばし待てと、あわてることなく日を選んで、作業を開始しました。

五

水野信元としては、そこを守る軍船や、鴫原の城からの仕掛けに苦慮して、織田信長の下に再三援助を乞いました。しかし、ちょうどその時は、織田信長は清洲以北を支配し尾張守護代であった、織田彦五郎信友と対立して戦を構えている最中で、とても援軍を出せる状態ではありませんでした。
信長が言うには、

「あせるな。しばし待て、今川が砦を作りあげて、構えていても、こちらから手を出すことなく何事も起こらなければ、
『水野や織田方は怖気づいて何もできない。これで安心だ。ここを拠点に、水野を撃てる。』
そしてしばらく待てば、戦の準備のために、守将だけを残して、一度は撤退をするから、その時が好機である。それまで良く見張っていて、その時を知らせよ。」
と、返事を返してきた。この手紙を見て、信元は、
「本当に大丈夫かなあ。作っている時が一番攻め易いと思うけれど。わしはあのうつけと呼ばれた織田信長と心中する気はないのだ。危なくなったら今川に与力した方がいいかもしれない。しかし、あの威張っているいやらしい義元のところに人質を出す気はないし。」
村木の砦は緊張感も徐々に取れ、のんびりと三ヶ月ほどかけて出来上がった。今川の三千の軍勢が見張る中を、三河中の大工・左官・人夫を駆り集めて砦作りが行われた。
山を崩し、地を均して、土台となして、その上に城の様な砦を作り出した。指図するは、発起人の石川新左衛門で、手に持っている砦の見取り図は今川義元直筆の図面であった。
周りを掘り下げ、石垣を組んで堀を作り、橋を架けて、土塁を盛り、柵を作った。全体の広さは、南北が百二十間（約220m）、東西が百間（約180m）ほどで、その中に六十間（約108m）四方の館を組み立て、乾坤（西）の方角には、隅櫓を組んで、その下に搦め手の門を築いた。堀の中には逆茂木や撒き菱が張り詰められた。更には水を導き入れた万全と思われる砦を築いた。
これでよしと、九月には完成式をして、同じ松平ながら、元康とは遠い血縁関係で早くから今川に与力していた松平筑前守長勝を城代として、他のものは引き上げた。しかし、今川軍が攻めて来る気配は見られなかった。　守備兵は少しずつ減り続け、年末には三百人程に減った。
時々、鷹狩りだ、鵜を捕まえよと、周りの田圃を散々に荒らしまわった。水野信元や織田軍が攻めていかないので、今川勢も、
「腰抜けの織田勢め。恐れをなして攻めてこないではないか。信元も近いうちに降伏してくるだろう。」
と、安心していた。しかし、水野信元だけではとても攻撃するだけの武力はなかった。彼には全軍で五百人ほどしか兵を集められる領地しかなかった。しかも半分は弟の水野清六郎忠守が指揮を取っていた。当時としては篭城する敵を攻めるためには、三倍の兵がほしかった。更に、モタモタしていたら、鴫原の砦からまた三百人の応援がすぐに到着するだろう。どうしても織田信長の援軍が欲しかったが、一兵も送ってこない。
義元からはいろいろな武将を通して、今川に下るように誘いがあったが、彼は、信秀以来の恩を感じ、信長の指示を信じて、裏切ろうとはしなかった。しかし、心は揺らいでいた。けれど、信長の予想したように、今川軍は守兵も少なくなり、安心しきっていた。信長への情報提供は欠かさずに毎日のように出していた。
今川義元は、寺本の佐治氏に使者をたびたび送り、味方になるようにと勧めた。佐治氏からはよい返事が返ってきた。あとは、水野信元さえ味方してくれれば尾張は半分取れたようなものだ、と考えていた。

六

天文二十三(一五五四)年正月十六日。小正月も終わって、そろそろ梅の花も咲き出し、春めいてきだした、美濃の国は稲葉山の斉藤道三の館。道三が古くからの家老の一人である安藤伊賀守範俊を特別に呼んで話を始める。
「尾張の婿、信長から密書が届いた。上尾張の織田勢と戦っている最中なのに、知多地方を今川に取られてしまう。全軍を上げて水野信元を助けに行かなければならないから、舅であるわしに、那古野城の留守を守ってほしいとの依頼が来た。おぬしどう思うかや。」
安藤範俊が答えるに、
「殿に留守を頼むとは、うつけめ、何を血迷っているのか。どこまで本気でございますか。」
「わしの婿をうつけとは何事か。口を慎め。とは言うもののやはり、あやつの考えが良くわからん。どこまで本気なのか。我が美濃軍を今川軍と戦わせる気かもしれない。」
当時としてはたとえ親戚とはいえ、城を全部明け渡して助けを頼む事は考えられなかった。援軍としてわずかな兵を引き入れただけで裏切られて乗っ取られる事もしばしばあった。
「申訳ありません。つい本音が出てしまいました。今川に敗れるか、それとも我々の軍が城を乗っ取ってしまうか。どちらにしても織田信長の命はそう長いものではありません。」
「そこでじゃ、おぬしに那古野城の留守居役として出陣してもらいたいのだ。」
「おまかせあれ。どうせ、信長が、一度出陣したら、帰ってくるまでに一か月程はかかることでしょう。留守居の武将たちに難癖をつけ、いざこざを起こさせ、信長が帰ってくるまでには那古野城を乗っ取っておき、疲れ切って帰ってきた信長軍を城内から打って出て、亡き者にしてしまいましょう。お濃の方はそれ以前になにか安全な方法で美濃に送り返しますのでよろしゅうございますか。」
「さすが、わしが見込んだだけはある。そこまで配慮してくれるか範俊。しかし、早まるでないぞよ。信長の動きを見た上で、きやつに武将としての価値がないものと分かってから行動に出るように。」
「心得ております。もし、信長が、この苦難をたやすく乗り越えたならば、天晴れな武将として、殿のお目にかなうよき婿殿と認め、城を返して引き上げてまいります。そんな事はまずない事と思いますが。」
「うむ、信長は全軍でも一千の兵だろうから、戦いに疲れて帰ってくることだし、こちらが城内にいるのだから。同数で十分だろう。そちに一千の兵を預けるから、よろしく頼むぞよ。ついでに、濃の命もな。」
「かしこまりました。いつ出発すればよろしいでしょうか。」
「急いでいるようだから、明後日の、十八日にでも出てくれるか。三日もあれば、那古野城に着けるであろう。食料は向こうで調達すればいいから、準備にはそう時間もかからないだろう。」
「かしこまりました。那古野の城の中のものは全て、美濃のものと思って使わせていただきます。難癖付けられれば勿怪の幸い。すぐに占領してしまいます。」

七

織田信長としては、清洲の織田彦五郎信友と戦っている最中だし、自分の城である那古野城を空にしたら、織田彦五郎信友だけでなく、その他の織田軍にも簡単に取られてしまう。兵力を裂いて、半分の五百の兵で水野信元を助けに行ったら、砦を落とすのに時間がかかってしまい、モタモタしているうちに、残った五百の兵では、上尾張のいくつかの織田が同盟を結んで攻めて来たら、こちらも危なくなってしまう。できることなら、全軍を挙げてすばやく行動してすぐに村木砦を潰して引き返して来たい。
そこで一計を案じた。今まで誰も気が付かないし、考えも及ばないことをやってのけようとした。それがなんと、嫁の濃姫の父親、「マムシの道三」と恐れられている、美濃の斉藤山城守利之入道道三に留守の為の援軍を頼むという計画である。
妻の実家とはいえ、戦国の時代の事、援軍が城に入ったら、そのまま乗っ取られるのが普通に起る時代の事。そのような無謀なことをしても、すばやい行動ができて、すぐに引き返せば、美濃の軍も圧倒されて乗っ取られることはないだろうと考えた。
直ちに出陣の準備をさせて、美濃から留守役の援軍が来たらすぐに出発できるようにした。もちろん、食料から船の準備まで準備万端整えた。間者を使って、
「信長は清洲に全軍で攻め込む。」
といううわさを広めておいた。

八

天文二十三(一五五四)一月二十日に、美濃国稲葉城下から九里(三六km)の道を三日間かけて安藤伊賀守範俊が一千の兵を連れて那古野城に向かった。一千騎の軍隊をいくつかの川(今の長良川・木曽川:当時はまだいくつかに分流していて川筋はたくさんあった。))を越えてやって来ればそれだけの時間がかかるのが普通であった。
物見の連絡により、
「道三の家来の安藤伊賀守範俊と、田宮甲山安斎・熊沢物取源五などが一千騎の軍隊を引き連れて那古野城にやって来ます。」
と、すでに情報が入っていたので、信長の軍隊一千騎は、出陣の準備を整え、城外に勢ぞろいをして待っていた。信長の前に、美濃からの留守居役大将安藤範俊が進み出て、
「お待たせいたした。私が、道三殿から那古野城の守備を任された安藤伊賀守範俊です。」
と、挨拶をすると、
「さすがに舅殿、この信長の意を汲んで、安藤伊賀守範俊と一千の軍隊であれば、安心してこの城を任せられるわい。よく来て下さいました。我々は今すぐに出陣しますので、後をよろしく頼みます。」
「と、言われましても、どのように守ればよろしいのですか。」
「どのようにと言っても、すべてを任せるのだ。好きなように守ってくれ。注文はつけまい。後は、お濃とよく話し合ってくれ、わしには時間がないのだ。七日以内には戻ってくるからそれまでよろしく。」

信長は尾張軍に向かって、
「それ、全軍、美濃の衆にお礼を言って出陣じゃ。」
「オー、美濃の衆よろしく頼みます。」
と、鬨の声をあげて信長軍は出陣して行った。
向かったのは、南の知多方面へ、ではなく北の織田彦五郎信友の支配している春日井郡志賀・田端の両村に攻め込んだ。北に攻めると見せかけるためだ。織田信元の支配する春日井郡の小さな村々をなるべく大げさに荒らしまわって、すぐに兵を静かに南へ向かわせた。
驚いた清洲城の織田彦五郎信友は、すぐに篭城をした。今までに散々振り回されて信長の強さを知っていたから、篭城が一番と思った。

九

美濃の軍隊は、あっけに取られ、恐る恐る那古野の城内に入城した。中では、お濃の方が待っていた。
「おう、これは、これは、安藤伊賀守範俊殿ではございませんか。夫信長のお願いをよろしく頼みますぞえ。さすがに、我が父道三だ。わらわのよく知っている、賢明なる安藤伊賀守範俊殿を御遣わしあらわされるとは。」
「これは、これは、お濃殿、お懐かしゅうございます。して、どこまで我が軍が入り込んで守ればよろしゅうございますか。留守居の武将殿はどなたで、どこに居られるのでしょうか。」
「留守居の武将は誰も居りません。男集はすべて出陣いたしました。どこで守るといっても、そちが必要とするならば、本丸だろうが二の丸だろうが、大奥だろうが、すべて自由にお使いください。只今からそちがこの那古野城の主である。我が夫、信長が帰城した時に、マムシの道三の部下として、美濃の衆として、恥ずかしくない状態でお返しくだされば よろしいのです。」
「これは参りましたな。留守居の武将がひとりもいないとは。いさかいを起そうにも相手がいなくてはできませぬな。それでは食料も武器も金もすべて我々の自由にしてよろしいのですか。
我々が裏切ったらどうするおつもりかな。」
「父の道三がそちを遣したからには、我が夫信長もそちを全面的に信頼しての行動です。それが道三と信長の信頼関係です。いざ、わらわにも命令を出してくだされ。」
「滅相もございません。そこまで信頼されたからには、信長殿が帰られるまで、きちっと何事もなきように命に代えてでもお守りいたします。大奥はもちろん、本丸・二の丸までは一切手をつけません。留守居の間に使う少々の食料だけをお願い致します。」
「それなら、わらわは女衆を連れて城下の武将宅に避難したいますので後をよろしく。この那古野城全部の鍵がこれで御座います。これをお渡しいたしますのでなんなりとお好きなだけどうぞ。昨年は豊作でしたので、まだ十分食料は御座いましょう。」
安藤伊賀守範俊は直ちに美濃軍の武将を集め、兵士のほとんどは野営させ、一部の武将だけを、三の丸に宿泊させ、それ以上の城内へは美濃衆をひとりも入れなかった。外部への見回りだけは厳しく守らせた。けんかを吹っかけようにも男衆はすべていなくてはもめごとも起しようがなかった。

十

信長の軍は二手に分かれ、二十一日の早朝に志賀・田端の両村の砦を襲った。はげしく攻め込まずに威嚇しただけであった。攻めるときは派手に騒いだが、引き返す時はひっそりと、これでも同じ軍隊かと思われる変わりようであった。
これにより、清洲の織田彦五郎信友を始め上尾張のいくつかの城は篭城し始めた。今までの経験で、清洲に向かうと見せて、別の城に攻める可能性があったからである。それでも、まさか知多半島に行くとは考えなかった。今川方の間者も、信長がよもや村木の砦に攻めていくとは思わなく、今川義元の元には、
「当分信長が村木砦に出陣するとことはない。安心せよ。」
と、連絡した。
二十一日の夕刻には、信長は神も仏も信じなかったが、兵たちを鼓舞するために、織田軍千騎が熱田神宮に戦勝を祈願して、その前にある宮の渡しの港に勢ぞろいした。そこにはすでに、信長が集められることのできるだけの軍船を待機させていた。信長は海部郡を支配していたので津島などから大量の船を廻すことができた。千騎の軍馬を乗せるに十分であった。五十名の武将を乗せる帆船が十艘。三十名乗せる帆船が十隻。二十名乗せる帆船が十隻。それに荷駄を乗せる船数知れず。
二十二日の朝があけたけれど、あいにくと冬には珍しい暴風雨となった。しばらく待機したが、風雨はますます強くなるばかり。待つほどに激しさを増しだした。
信長はこれ以上待てないと、
「船を出せ。」
と命令した、しかし船頭たちは、
「この風雨ではとても無理です。しばらく待機することが賢明かと思います。お待ちください。」
しかし、信長は聞かなかった。
「その昔、源平の戦いの折に、源九郎判官義経が、屋島にいた平家を討たんものと、大阪の渡辺の港から船を乗り出した時は、これよりはげしい暴風雨だったはずじゃ。天は我に加担している。見よ、この風向きを。知多の方向に吹いているじゃないか。神風だ。」
巳の刻（10時）には無理矢理に船を出させて、折からの伊吹颪の強風雨の中を、帆を張らせて、出発する。目指すは知多半島の先端の幡豆岬。海上十五里（60km）もある。疾風に乗って瞬く間に、トドメキ（現東海市名和町）の岬を横に見る。
ここまでに遅れを取った船は、これより阿由知潟（今の天白川付近）に入り、大高の港より陸路を村木村にととらせる。大高からなら陸路で、2里10丁で村木砦に着けるが、今川方の見張りに見つかる可能性が高い。副将の織田信光が300名ほどの軍勢で大高の港へ向かった。信長本隊はわざわざ知多半島の南端を大回りして緒川へと向かった。
鬼崎（現常滑市）・富具岬（現美浜町野間）と勢いをつけ、辰巳（南東）に舵を取って、嵐の順風満帆、内海を越えて、師崎の港に収まる。信長の勢いに負けたのか、富具岬を越えて頃から風も収まりだし、幡豆岬を回る頃には凪の状態となり、申の刻（4時）には師崎の港に上陸でき

る。十五里の海上を見事に三時(とき)(六時間)ほどで踏破できた。今宵はこの港にて野営となる。しかし、師崎を支配する千賀重信の供応を受けて、新鮮なる海鮮料理のご馳走となる。信長の支配地は海に面しているから、武将の多くは新鮮なる海産物を知ってはいるが、それでも生まれて始めての新鮮なる海産物のうまさに驚きの声を揚げる。海鼠腸(このわた)・生タコの刺身・海老の踊り食いなどこの世のものとは思えないほどの美味である。
千賀重信一族は、宮(熱田)の岡本善七郎や、津島の神官出身の堀田五郎と共に伊勢湾の海運を支配し、義兄弟の仲にあった。信長の海軍を引き受け、諸国の産物の運搬を引き受け、時には海賊とはや代わりすることもあった。後の信長の主力海軍となる熊野灘の九鬼一族とは当時はまだ対立関係にあった。

十一

明けて二十三日冬晴れの中を静かに大足(現武豊町)の港まで船にて渡り、迎えに出てきた水野信元と対面する。水軍は明日の戦場の海上封鎖に回すために亀崎の港へ静かに廻わさせる。帰りは陸路を那古野城まで帰る予定である。
「信長殿わざわざ御自らの出陣有り難う御座います。これで、村木の砦もすぐに落ちる事でしょう。」
「挨拶はどうでもよい。それよりか早く静かに緒川村に到着し、村木の砦を閉鎖する事が肝心じゃ。わしの出陣について今川方には漏れてないだろうな。」
「は、ご安心ください。今川方どころかわが軍でも、殿の出陣を知るものは数少ない状態です。」
「大高より上陸した三百人ほどがすでに到着のはずだが。」
「確かに昨日のうちに村木村に到着し、我が軍五百名と共に村木砦を取り囲んでいます。もはや村木砦はネズミ一匹這い出す事もできません。これより緒川村まで陸路四里強で御座います。急げば二時(とき)(四時間)程かと思います。道も海岸に沿い平坦なところばかりです。」
そして信長軍の主力は、申刻(午後四時)には緒川の城に到着する。
昨日のうちに大高に上陸した三百人の将兵は途中にいるはずの、今川方の見張りもこのような天候ではだれも通らないだろうと、村木砦と、寺元に引き上げていて、今川方には村木砦を囲むまで悟られる事はなかった。
よもや今川勢は、この時化の中を大軍が船で出陣したとは思わなかった。鴫原の城にいた今川の援軍も「信長は清洲城を攻める」の情報を得て、のんびりした状態で、要請もなければ、準備もしていなかった。
二十二日の夜には村木砦を水野軍と織田軍の一部で包囲したままで、時々鬨の声をあげては敵軍の気勢をそがせた。アリの子一匹通れない状態にして、守りを固めた。城内から鴫原に連絡を取る事ができなかった。二十三日も一日中同じ状態で、攻めるぞ、攻めるぞと脅かし続けた。砦内の今川軍はすでに浮き足立ってきた。その状態にしておいて、信元は、従者を十名ほど連れて大足まで信長を迎えに行ったのである。

二十三日に信長は緒川の城に到着するや、直ちに物見を出し、自らも日の暮れぬうちに村木村の山の手に立ち、明日の戦場になる場所の検分をした。村木砦の周りの地形・天候・潮の流れ、山の樹木の茂り具合、砦の内外の状態・今川軍の配置や軍勢の意気を探らせ、軍の配備を終えてから、夕食をとって、その後に、刈谷の城主水野下野守信元とその弟で緒川の守将水野清六郎忠守らと軍議を開いた。

十二

水野下野守信元にとっては、父親の信秀からの付き合いで織田方に与力していたが、まだ、信長の本当の力を知らない。しかし水野信元にとっては、全軍を集めても五百騎程しかいない弱小大名でしかない。この戦いで負けることがあったら、権威を傘に着ていばっている、いやらしい今川の傘下に入るつもりであった。
岡崎の松平家のように、人質を取られ、織田との戦いの時には先陣をまかされ、多数の犠牲を払わなければならない。できれば今回の戦いも、水野家のための戦いだが、なるべく犠牲の少ないようにしたかった。彼が集める事のできる軍隊は五百騎程だが、今までの小大名同士の戦いでは、二百騎も動かせれば、十分な戦力であった。
信長は、村木村の地形図や城の見取り図を見て、配置を決める。水野信元の意見も聞かずに次のように指示した。
「東の大手門へは、緒川の城主水野清六郎忠守殿が、刈谷・緒川の軍勢三百騎にて攻めよ。西の搦め手からは、我が、織田軍の副将の織田孫三郎信光が軍勢五百騎にて攻める。南の大堀を越えては、わし、信長が本隊五百騎にて攻める。北は崖になっていてその先は湿原であるからここからは見張りだけ置いて攻めないし、武将も配置しない。砦からの使いが出ないように、見張りを置くだけだ。水野下野守信元殿は水野軍の残り二百騎にて、わが水軍と協力し、対岸の刈谷に構えて、今川の援軍が来たらそれを阻止する。あるいは逃げる今川軍を横から討伐する。以上だ。何か不服があるか。」
信長の喋り方は若干二十歳に過ぎないが、わずか三年間で、何度も修羅場をくぐっているだけあり、命令口調であるが、水野信元にとっても納得いく配置であった。
信元は、心の中で、
「この戦いは信長軍が主力となって攻撃してくれるので、水野軍にとってはあまり、犠牲が出ない配置だ。それにしても信長め。すごく強気だな。どっちに転んでもこれで安心だ。」
と、思いながらも、信長に対しては、
「承知した。すべて仰せにしたがいます。信長殿の援軍のすばやい動きを見て、この戦いは必ずや勝つであろうと確信いたしました。我が軍も全力を出して戦います。して攻撃開始は。」
信長からは、
「明日は春先には珍しいほどの上天気となるであろう。総攻撃は明朝辰刻（朝八時）である。信元殿・忠守殿よろしいかな。」
忠守が、
「早春とは言え、卯刻(朝六時)には明るくなりますが。」

信長がすぐにさえぎって、
「辰刻でよろしい。戦で十分に動き回れるように朝食をしっかりとって腹ごしらえをして、太陽がしっかり出て、もやが消えてからでよろしい。我が軍には種子島(鉄砲)がある。完全に明けきってからの方が、効き目があるのだ。」
と言うことで軍議は簡単に終わり、その夜のうちに全軍に指示し、配置に着かせる。水野軍は、地元で集結して待っていたから問題ないが、織田軍は三日間の行軍と風雨の中を移動して来たにもかかわらず、意気軒昂であった。
今川方の守備軍は信元の弱腰の態度に安心しきっていて、わずかに三百人ほどであり、援軍を頼む間もなく包囲されてしまい、城に入るための橋を切り落とすことすらできなかった。城門を硬く閉じて立て篭もっていても、すでに戦意が落ちだした。援軍依頼の使いは出したが、もはや囲みを通り抜けることは不可能であった。
二十三日は寒さの中を静かに暮れていった。嵐の前の静けさであった。

十三

一月二十四日夜が明けだすと、今川方はいつ攻められるかと落ちついて朝食の準備もできずに怯えていたが、織田・水野軍は朝の食事をしっかりと取って、朝もやのなくなるのを待って晴天の中、日が昇ってから、辰の刻になるのを待って、三方から一度に鬨の声をあげて総攻撃を開始した。
南から攻める本隊の信長軍は、堀を挟んでの弓矢の打ち合いから戦いが始まる。その弓矢の打ち合いの中で、新兵器の「種子島」を多数持ち出し、信長自らが次から次へと、相手方の中央部の一番頑丈そうな二つの狭間の間に打ち続ける。雑兵が弾を込め、筒を掃除して、火をつけて信長に次々に渡すから、信長は連続して種子島を撃ち続ける事ができる。これなら、種子島が一発撃つまでに時間がかかるといっても連続して撃ち続けられる訳だ。
今川軍にとってはうわさにしか聞いたことのなかった種子島の威力に驚き、すぐに浮き足立ってきた。大将自らの活躍により、弱くなった狭間へ勢いを得た織田軍が堀を渡って押しかけた。強力そうに作られていた南面は種子島の前ではいとも簡単に破られることとなった。
しかしそれよりも早く織田孫三郎信光が攻める西の搦め手では、奇襲で回りを囲ってしまったので、今川軍は橋を切り落とすことができなかった。その橋を通って、楯を持って矢を防ぎながら、門前にたどり着き、勇猛な六鹿椎左衛門と言う者が搦め手門を打ち壊し一番乗りをとげた。それに勢いを得て織田孫三郎信光の軍勢五百騎が一気に砦内になだれ込んだ。たちまちに城内は入り乱れての白兵戦となった。
その勢いで、敵の守りは総崩れとなり、城内は混乱した。海岸の船着場から攻め込んでいった水野軍三百騎も最も頑丈な東の大手門を打ち破ぶり、水野清六郎忠守の鼓舞する声に、織田勢に負けるなと続いて、切り込み激しい白兵戦が続いたが、勝敗は夜を待たずに決した。申の刻(午後四時)には終わってしまう。今川の総力を集めて作った砦だから、頑丈なる作りと思われたが、信長の前には「張子の虎」でなく張子の城でしかなかった。

朝の辰の刻（8時）から午後の未の刻（2時）までははげしい戦いであったが、その後は総崩れとなって、申の刻（4時）には、今川軍の松平筑前守長勝は降伏を申し出る。早春だからすでに陽射は西に傾きかけていた。ここに勝利の鬨の声をあげ戦いは終わった。守将の責任者松平筑前守長勝は切腹させずに、縛り上げた上で、緒川城に送り込んだ。今川方で降伏したものの内で、名のあるもので信長に仕える気のあるものは許し、信長の配下に置いた。雑兵は丸坊主にして水野水軍の船にて、三河方面に解き放つ。
今川義元自らが設計し、今川の総力をかけて作った村木の砦はわずか一日にして陥落してしまった。

十四

織田・水野の軍兵の犠牲者はわずかに四十名ほどが戦死しただけで、傷ついたものもわずかな数でしかなかった。その傷ついたものはすぐに緒川城内に入れて手厚く看病をした。
戦いが終わった後で、織田・水野の軍は村木村の北西の山陰で休息し、村人がさし出た、勝利を祝っての握り飯・酒で飲食をしたので、その場所を後の人々は、「飯食場」（注1）と呼ぶようになりました。
この村木砦はすぐに、信長から信元に気前よく引き渡された。信元はすぐに、水野清六郎忠守に後片付けと守備を言いつけた。普通は占領した信長が支配すべきところですが、信長は未練もなく引き渡してしまいました。水野清六郎忠守は、すぐに命令を出して、村木村出身だった長老の清水八右衛門と、清水権之助兄弟にこの砦の後片付けと守備をさせる事にしました。
この夜は信長も緒川城にとどまり、祝勝の宴をいたしました。
清水八右衛門は、村木村の農民を集めて、砦内の片付けをさせました。壊れた建物はすべて焼き払ってしまいました。死体を集め、村木村の西にある窪みにまとめて葬らせました。その上に土をかぶせ、松の木を植えて目印としました。そこで後の人はそこを「首塚」（注2）と、呼ぶようになりました。
この戦いの前に、水野軍は緒川の八幡神社と入海神社で勝利を祈願しましたが、清水兄弟はそれとは別に、味方の戦勝を祈願して、八右衛門は村木村の八幡宮に、権之助は同村の、八剣宮にお参りしていました。その後に、この村木砦は取り壊されますが、村木村を支配するようになると、それぞれ、それまで粗末な小さな祠でしかなかった、八幡宮と八剣宮（注3）をそれぞれの氏神として立派な神殿を寄進し、後々の世まで両神社は栄える事となった。
六年後の桶狭間の戦いで今川義元が死んだ後、この地方は平和になりましたので、村木の砦はすべてを打ち壊し、ならして、畑として農民に分け与えました。死者の怨念が入っていたのか大根が良く実ったそうです。明治になって、鉄道を建設する時に、この村木の砦跡は線路を引くために切り崩されました。人骨がいくつか出てきたそうです。
東側には広い塩田ができました。南側は田圃として開発されましたが、北側はその後も、堤防のない自然の流れにまかせた石ヶ瀬川の河口のままで葦の茂る荒地でした。その後徐々に土砂で埋まり、堤防ができ良田となったのは江戸時代も半ばになってからです。
注1：：「いぐいば」と読み、今も東浦町森岡に地名が残っています。

注2：：今も森岡の人の間でこの名は使われています。
注3：：八幡社は今も村の鎮守の神様として村社になっています。八剣社は、村木砦の跡の畑と鉄道線路の間に祠が残っています。

十五

その夜、緒川城内にて、織田軍・水野軍の合同の戦勝記念の宴会が催されます。首座には信長が座り、水野信元・忠守兄弟は、臣下の席におさまって会が始まった。
信元が切り出して、
「戦勝おめでとう御座います。さすがに信長殿はお強い。お陰様で、我が水野家の領土は無事に守ることができました。しかも占領した砦までお渡しくだされ有り難う御座いました。今後も織田家に与力して、ともども繁栄したいと思います。よろしくお願い致します。」
信長は、
「それにしてもこの緒川の地はさすがに遠いのう。那古野の城からここまで、知多半島を回ってきたら、三十里（120㎞）以上あるではないか。水軍を利用できたからよいが、三十里とは、京と同じ距離になるのではないか。京までは鈴鹿の峠を越えれば三十里と聞いておる。同じ尾張の国なのに、とても我信長一軍では支配できない。そこで、今まで通り、水野信元殿には、知多郡の土地を安堵するから、しっかりと三河を見張っていてもらいたい。三河の土地はどれだけ取っていただいてもかまわない。部下としてではなく、友軍としての付き合いをお願いした。」
「有り難う御座います。身に余る光栄かと存じます。」
「それで、とらえてある松平筑前守長勝も、元康の親戚筋だ。今は今川の勢いがよくて今川に与力しているが、やがて元康が独り立ちした時には有力な協力者になるだろうから、今回はこっそりと解き放ってしまえ、決して首をはねるなよ。」
「はは、折角捕まえた松平筑前守長勝を許されるのですか。敗残の将を殺さないとは腑に落ちません。戦国の世の習いには反しますが。」
「かまわん。負けた武将をことごとく殺していたら、今にまともな武将がいなくなってしまう。雑魚ばかりになっては支配できる人間がいなくなり、戦国の世が長引くばかりだ。わしは戦国の世を統一するつもりじゃ。有能な者は残しておかなければならない。それよりか、見せしめのためやむおえないことだが、村木村の農民で、今川に協力したものの首をはねよ。」
「え、農民の首をはねるのですか。やむをえず、おどかされて今川の仕事をさせられたものどもをですか。」
「けじめをつけるためだ。武将も助け、農民もそのままにしたのでは天下へのけじめがつかない。今後の支配をしやすくするためには裏切ればどうなるかだけは示しておかなければならない。おぬしに任せるから、5人ほどは磔にせい。」
松平筑前守長勝は、3日間土牢に入れられた後、解き放たれました。その後の行方はしばらく分かりませんでしたが、桶狭間の戦いの後で、松平元康が三河を支配し始めると、元康の下にはせ参じ、家来になりました。

信元の命令で、清水八右衛門は、はたと困ってしまいました。これから自分が支配していかなければならない村木村です。農民で好きこのんで今川に協力したものはいなかったのです。やもをえず、病人を5人集めて、それぞれを村の有力農民の身代わりとして、死刑にしました。有力農民は大府村や横根村にしばらく隠しておいて、ほとぼりが冷めたころに帰村させました。信元から信長に5名の処刑者の名簿が届けられましたが、信長からは何の返事も返ってきませんでした。
注：今でもこの処刑場跡が残されています。常滑水野氏の末裔が現在は住んでいて、この時の怨霊を鎮めるために法要しています。

十六

さて、元の宴の席に戻ります。
「砦の地は元々水野のもの。水野家が与力してくれたお陰で、今川勢を尾張から取り除く事ができた。今後もよろしく頼む。間もなく尾張の統一もできようから、その後は今川勢を三河からも、駆逐する覚悟じゃ。それまで苦しいだろうが頑張ってもらいたい。しかしな、そこもとにとっては、甥にあたる松平元康とはなるべく、事を構えないようにうまくやってくれ。」
「殿も松平元康には気をかけてくださるか。有り難う御座います。あやつも織田信長殿に劣らぬ優れものですので、今は今川の人質ですが、そのうちにお味方になられることでしょう。つきましては、水野信元の忠誠の証に、那古野城に人質を出したいのですが。」
すると、信長は、
「たわけめ、人質などいらぬわい。あのようなまやかしで俺はだまされないぞ。人質などさし出されても裏切るやつは裏切る。それよりか、兵士を出してくれ。もちろん武将もつけてな。」
「戦となればいつでも水野の軍を差し出しますが。」
「そうではない。俺の考えではな、我が軍の武将は今までの武士の様には領地に住まわせず、わしの部下はいつも一つの城下に住まわせ、日頃から軍事訓練を施して一つの軍隊として持っていたいのだ。今までのように家来には土地を分けてやらん。支配のための代官を置いて城に収穫物・銭を集め、各家来にはわしのほうから給与として渡す。武士と農民をハッキリと分けたいのだ。一国に一つの城と一つの城下町があれば間に合うのだ。敵が侵入してきたり、反乱があったりすれば、今回のように大軍として駆けつければ間に合うのだ。
家来のそれぞれに土地を与えたのでは、領地が増えるたびに、武士が分散していってしまう。それで戦国の世になってしまったのだ。それに軍事演習もまとまってできないではないか。いざという時に役に立たん。さらに、支配された農民もいつ軍隊にとられるかとびくびくして農作業にも熱が入らん。農民を駆り集めて作った一万人の軍隊より、日頃から訓練してまとまっている一千人の軍団の方が役に立つのだ。」
と、一気にまくし立てて一息入れ、一杯飲み干すとさらに続ける。

十七

「おぬしら水野家も、刈谷・緒川・常滑・大高と各地に分けて、それぞれに武士を配属したのでは強い軍隊にはなれないし、いざと言う時には役に立たない。同じ一族といっても分かれて住んでいたのでは、世代が変わってしまえばだんだんと疎遠になっていってしまう。そのうちに他人と同じになり、対立も起きようものだ。
もう知多に敵はいないのだから、特にこの緒川は、刈谷とは指呼の間じゃ。農民を支配するための才能を持った代官を置いて、刈谷に戦える武士を集めておけば強力になるではないか。そこで、あまった弟の水野忠守をわしにくれ。百人ほどの兵士をつけてもらえばなお助かる。」
「なるほど、人質より武将でございますか。」
「これなら、そちが謀反を起そうものなら、同族の忠守めが先陣をきって、攻め込んで来るであろう。同士討ちになってしまう。どうじゃ、人質よりよほどいいだろう。それに、そちも自分で動かせる軍隊が今より増え、わしも軍隊が増える。一石二鳥どころか一石三鳥にも、四鳥にもなるだろう。」
「恐れ入りました。さすが信長殿。武士はまとめて置いたほうがよろしい様で。忠守は信長殿の考えをどう思うか。申してみよ。」
忠守が、
「お若いのにさすが信長様、私の考えも及びつかないことで、喜んで信長様にお供仕ります。この緒川には、農民に親しまれ、武力より、そろばんに適した長老山田主計頭がおりますので、それに城を任せて、緒川の武士の半分は兄者にまかせて刈谷に住まわせ、半分を拙者が率いて信長殿にお供仕りたいと思います。」
「さすが、忠守殿、決断が早い。早いついでに、よろしかったら、明朝、我が織田軍とともに那古野に向かいますかな。戦で亡くした三十人を越える百人もの精鋭を得たとあらば、今回の戦は満足じゃ、大勝利じゃ。明日の朝は、寺本を脅かせてから那古野に帰るから、信元殿、後は寺本の佐治を俺に与力するように説得してくれ。」
忠守が、
「たしかにこの忠守は、明朝より信長様のお供を仕ります。早速に人選をして、準備いたしますので、今夜はこれにて失礼させていただきますほどに。」
水野信元は、
「かしこまりました。寺本に使いを送り、駄目なら自分でおもむいてでも説得いたします。今回の戦いぶりを見れば、もう知多地方で今川にくみするものはなくなるでしょう。それにしても『種子島』の威力はすごいものですな。あれなら一度撃って次に撃てるようにするのに時間がかかって、役に立たないと思っていた種子島も戦に役立ちますな。」
「なあに、あれはまだまだ序の口じゃ。今にもっとたくさんの種子島を集め、種子島軍団に仕上げるつもりじゃよ。一丁や二丁では役立たないが、何百丁と集めて訓練し、弓矢のようには一度に撃たず、三段か四段に分けて打ち込めば、次々と発射できる。近いうちに種子島が戦の主力になる時が来るぞ。おぬしもせっせと種子島を買い集めるが良い。そういえば、この水野領では、塩がたくさん取れて儲けているようだが。」
「はい、確かに、幸いに衣浦の海は浅い海にございますれば、せっせと塩田を作って、増産に励んでいます。しかし、なかなか売るのに手間・隙がかかりまして。」

「そうか。それならまもなく清洲城が取れるので、そうすれば尾張を全部手に入れるはたやすいこと。その暁に、清洲の町は、『楽市・楽座』にするつもりじゃ。」
「は、なんと申されましたか。」

十八

「楽市・楽座だよ。それはな、商人なら誰でも自由に商売できるようにするのじゃよ。今までは、商人といえども、武士のように縄張りがあって、
『座じゃ、株仲間じゃ』
と言っていては、商人の出入りが難しく、商品も人も集まりにくくて売れ行きが悪い。「座の権利」を作って売って入る収入より、より多くの商人に開放して自由に商売をさせて、たくさん儲けさせてその中から運上金を取れば、いくらでも儲かる。
各地から人も集まるから、ついでに全国の情報も入って、間者を放たなくても相手の動きが分かるようになる。逆に間者が入り込んできたら俺の名前を全国に宣伝できるし、いいことだらけだろう。おぬしも清洲に塩をできるだけたくさん持って来てどんどん売ってドッサリ儲けて種子島をそろえよ。そうすれば我が軍はもっと強くなる。」
「は、たしかに。儲かりそうな考えですな。早速に家老の山田主計頭に命じて塩をもっと増産させます。それで種子島をたくさん買いそろえます。」
「その山田主計頭とやら面白そうなやつ、一度会って見たいものだが。」
「は、末席に控えておりますので、すぐにこれへ呼ばせますが。」
「そうかそこにいるか。こちらへまいれ、ここはおぬしが城代になる城じゃ遠慮は要らぬ。もっと近くに。」
山田主計頭が、前に進み寄って、信長に近づき、
「水野信元が家来にて、今は、水野忠守様に使えています山田主計頭直玄で御座います。以後お見知りおきを。」
「そうか。わしの申した事をそちはどう考える。」
「は、殿様の考えには感服いたしましたが、一部私には合わないように思います。」
「どこが不服か。」
「不服ではございません。考え方の違いで御座います。我が家は先祖代々水野の殿様よりも早くからこの緒川村に住み着き、『士土(しど)合一(ごういつ)』(注1)の家訓の基に農民と共に緒川村を栄えさせてまいりました。お陰様で、この緒川村は知多半島の村で一・二を争う広い土地を持つことができました。米・塩などの収穫もほかの村よりたくさん生産できています。しかし、我が家の家訓では平和な時にしか役に立たないと思います。この乱世を戦い抜く事はできません。
そのため、水野の殿様や織田の殿様のように才力や武力ある人に使え、後ろで農民を働かせて増産に励み、農民も安心して働けるようにし、能力ある若者を育てては、殿方に差し出すのも大事な役目かと思いますが。」

「そうだな。人間にはそれぞれ、才能があるから、武力に優れたる者は槍を取って戦をし、算盤に丈たるものはそれを後ろから助ける。それぞれの才能に合わせた生き方をすることが世の中をよくする源じゃ。せっせと励んで、戦のない世の中を作るために、協力してくれ。」
「早く世の中が織田信長殿の手で統一される事を祈っています。しかし、世の中が統一された平和になった後の武士はいかがなりましょうか。戦もなくなり、訓練にも身が入らなくなり、庶民からかけ離れた城下町に住んでいては、農民の心がわからなくなります。都に住む貴族の様に権力だけ振りかざして、堕落してしまうのではないでしょうか。それを心配しております。
それよりか、我が倅どもも間もなく戦場に出られる歳と思いますので、その節はよろしくお願い致します。」
「しかと。そちの息子達が経営に才能がないと分かれば、引き受けよう。戦には体力さえあれば誰でも出せるが、銭勘定は才能がいるからな。よく分かった。しかし、まだ尾張も統一できないのにもう天下を統一した先のことまで心配してくれるのか。それにしても難しい問題だな。天下を取るまでの宿題としておくか。ご苦労であった。緒川の支配を頼むぞよ。他の支配地の見本とするからな。」
注1：：農村は武士(士)と農民(土民)が一致協力しあって成り立つ。

十九

次の二十五日には、夜の開けきらないうちからもう、織田信長は水野忠守も連れて出発し、寺本の城の周りを略奪して威嚇し、今川へ与力すると村木砦のようになるぞ、と脅かして大高の港から熱田の宮の港まで春風に揺られて舟で渡り、その日のうちに那古野城へ引き返した。
寺本の佐治氏は後に、水野信元の説得により、織田信長に与力することになる。これで知多半島はすべて水野信元の勢力下になり、織田信長の強力な友軍となった。後ろに気を取られる事なく、織田信長が尾張を統一する勢いを早めて、三年後には完全に尾張一国を支配下にまとめることができた。清洲の城に拠点を構えると、『楽市・楽座令』を出し、商売を自由にして商業を盛んにし、運上金を増やすことができた。
それによりさらに三年後の今川義元の侵略に備えることができた。桶狭間の戦いを迎える時には尾張の大半の武士を清洲の城下に集めていて、よく訓練が行き届き、わずか三千人の軍隊であるが精鋭であって、三万人の兵を持った義元を打ち砕く事ができたのである。
二十五日夕刻には、織田軍は、行きより増えた軍勢で、しかも疲れを見せずに意気揚々として那古野の城に戻って来た。那古野の城を預かっていた、美濃の衆の安藤伊賀守範俊を初めとする一千の美濃衆はあっけにとられた。美濃の衆にとっては、どうせあと二十日位はかかるだろうとのんびり構えていたのに、この信長の行動の速さを見て、びっくりした。わずか五日間で往復して、しかも三度も戦をして帰ってきたのである。
お濃と安藤伊賀守範俊が大手門に迎えに出て、まずはお濃が、

「勝ち戦、おめでとう御座います。いつもながら早いお帰りで。城は無事にこの父道三の忠実なる家臣の安藤範俊が、守ってくれました。殿からもお礼を言って下さい。」
安藤範俊も続けて、
「おめでとう御座います。それにしても早いお帰りで、我が美濃の衆ではとてもこのように素早く行動することはできません。さすがに道三殿のお目にかなった信長殿。無事に今川を退治できておめでたいことです。」
「いや、いや予定より一日遅れてしまったわい。もっと兵を鍛えなければいかん。そちには留守を守ってもらいありがたく思う。いずれ道三殿には、
『この恩には後日報いるつもりだからよろしく。』
とお伝えください。」
安藤範俊は驚いて、
「これだけ早く勝利を挙げてもまだ足りないと申されるか。どれだけ早く行動したら満足なされるのか。さすが道三殿の婿殿だ。明朝早々に引き上げますので、今夜は城外で野営させていただきます。」

二十

安藤伊賀守範俊は兵を率いて美濃の斉藤道三のもとに二日がかりで、九里（36㎞）の道を帰っていった。来た時よりは一日早く帰った。少しはまねをしたのだ。一千人もの大軍が行動するには、これでも早いほうであった。三日くらいかかることが当時の普通であった。
安藤伊賀守範俊は帰城するや直ちに、斉藤道三に、信長の行軍の素早さ・戦いぶりについて報告をした。
「とても城を乗っ取ろうという隙はありませんでした。余りにも見事に、城を空にして、すばやい動きで駆け回り、あっさり勝利して、軍隊を増やして帰られました。お濃殿も、美濃の援軍に安心しきった様子で、少しも疑うことなくすべてを私めに預けてしまいました。あっけにとられてしまい、どうしたらこの城が乗っ取れるかわからなくなってしまいました。
乗っ取ろうにも五日間は私が領主でした。それ以上には取るものがございませんでした。城を明け渡す時にも、お礼を言っただけで、城内を改めて点検しようともしませんでした。完全に信長様の方が私めより上で御座いました。」
道三の言うには、
「うむ、さすがにわしが見込んだ婿殿だ。隣の国にこのような男を置いておく事は末恐ろしい事よ。わしが亡くなった後で、わが軟弱なる子供たちは、この信長の下にひざまずく時がやってくるだろう。あまり恩に報いて欲しくないものよ。わしが思い願ってきた『国取り物語』は婿殿がかなえてくれる事となるだろう。」
と嘆いた。その後に道三は、自分の息子の斉藤義龍によって殺されてしまい、道三が予言したように、信長が美濃の国を全部平定した。すなわち、道三殿の仇を打って道三の娘のお濃に返してもらったのである。
「我が大事な舅である道三殿の仇を打つ。」

という名目を信長に与えてしまったのだ。歴史に「もしも」はないが、道三が殺されることなく生きながらえていたら、信長の美濃占領は遅れ、京へ上るのも難しくなり、天下統一はできなかったかもしれない。
それに対して、村木砦の落ちたことを聞いた今川義元は、怒りが先に立って、信長の強さを学ぶことができなかった。
「畜生め。油断してしまったから負けたのだ。これからは、こせこせとした戦いや謀略を使って領地を増やすより、わしが先頭に立って、大軍をもって一気に踏み潰して京に上ろうではないか。」
と考えて、三万もの大軍を率いての上洛の準備をさせる事となった。桶狭間の戦いの六年前のことであった。これが今川義元の没落の始まりである。

二十一

刈谷の城主水野下野守信元は、緒川の武士のほとんどを刈谷に移し、城下に「緒川町」（注1）を作って住まわせ、信長にならって、他の同族の家からも武将を集め、ひとつの軍団として専属の軍隊を訓練した。緒川城には留守居役としての五十名ほどしか武士は残らず、早舟が用意され、さらに種子島の火薬を利用して今までより強力な狼煙台を作って緊急時に知らせあえるようにした。これが三河地方に花火が栄える始まりである。
そして、信長の配下のもとに、その威力を後ろ楯にして、知多郡から、三河の碧海郡、加茂郡、幡豆郡へと勢力を広めていった。最も拡大した時で水野一族合わせて二十万石分の領地を支配することができた。
名目上は水野忠守が緒川城の領主であったが、彼は那古野の城下に住み信長の家臣として活躍した。山田主計頭が緒川城の城代家老となったが、城内には住み付かず、緒川城と向かい合わせになる谷ひとつ北にある先祖代々住み付いている「高藪の屋敷」に住んで支配した。この屋敷は城のように豪勢であったが、農民の出入りは自由にでき、まるで村の集会所のようであり、「高藪のお城」と農民からは呼ばれ親しまれていた。緒川城はあくまでも、水野家の城として管理され続け、殿様の帰るのを待っていた。
緒川村の周りでの戦はなくなり、農兵の分離が進み、平和の中で、山田主計頭とその子孫の采配により、農民は農作業・塩造り、漁業そして、海運を行い、繁栄していった。
そして能力ある若者を織田・水野の軍に差し出し、信長の全国統一のための陰からの支えとなった。以後、江戸時代に至るまで城主が代わっても同じように居住する城主なしでも平穏無事に暮らせた。
永禄三（1560）年、桶狭間の戦いの後に、独立した松平元康は、何度か伯父の水野信元と石ヶ瀬川を含む衣浦湾にて小競り合いがあったが、本格的に戦ったのでなく、両軍の力試しをしただけであった。
永禄五（1562）年に水野信元が織田信長と松平元康（後の徳川家康）の仲を取り持って軍事同盟を結ばせた。そのお陰で、水野信元は、領地が両者に挟まれているため、これ以上の領土拡大はできなくなってしまう。しかし、彼の領地からは戦がなくなり、平和になった。そのため

その民力は、田畑・塩田などを着々と増やし、他の地方より一足お先に、平和で豊かな土地となっていった。
けれども、水野信元が武士としての勤めを捨てたのでなく、領地は安堵され、ある時は織田信長に、ある時は徳川家康にと、援軍として出陣し戦闘にて多くの手柄を立てた。両者による全国統一の手助けをした。自分は領地を増やす事はできなかったが、兄弟・親族や子孫を次々と、有力家臣団として、信長あるいは家康に送り勢力を伸ばしていった。両家にとっても、さらには後に天下をとる豊臣秀吉にとっても、味方に引き付けたくなる有力武士軍団であった。
しかし、水野信元は長篠の戦で、武田軍を滅ぼした後、織田信長の家臣の佐久間信盛の讒言（うそ）により、織田信長の命令で、岡崎城の徳川家康を訪ねた時に暗殺されてしまう。その原因が、水野の領地でたくさん取れた塩を武田軍に送ったという讒言であった。
それにもめげず、水野家はさらに有力武将を送り続けて、やがては徳川家を松平家とともに支える、徳川幕府にとっての一番の親藩・譜代大名へと成長していった。徳川家は松平家と水野家とによって支えられてできた将軍家である。
注1：：刈谷市の元城下町部分に最近まで「緒川町」と呼ばれる地名が残っていた。

（完）

平成十七年二月二日
平成十七年三月十七日修正
平成十九年三月五日修正